



加夏子は、碧の眠るベットの脇にずっと座っていた。
一つしかない手を握り、もう片方の手で額や頬を拭っていた。
酸素マスク越しの呼吸が荒く、か細く、波のように繰り返される。
祈るしかなかった。

もう何度、殉と碧の病室を行き来したか。
おかげで足が少しは動くようにはなったが、杖をつきながら歩く彼女に歩行の喜びはなかった。

みどりちゃん
みどりちゃん
しっかりして
おねえちゃんがついてるから

お願い、もう一度わたしに笑いかけて
いつものように抱きついて
大丈夫だから

殉も心配だったが、ここの医者から怪我はちゃんと直ると聞かされ、少しだけ安心出来た。
その分、気持ちは容態の悪い碧へとどうしても向いてしまう。
目の前であえいでいるのを見れば尚更だった。

ふと背後に気配を感じて振り向いた。

病院服。ぼさぼさの髪。悲しげな眼差し。
戸口にもたれかかった反対側の袖には中身が無かった。

「…みどりちゃん…」

衣笠恵美子が、よろよろとベットの方へと歩いてきた。

「わたしがこの子を…こんな目に…」

残った手を、すがるように碧へ差し出した。

ばしっ

その手をカ一杯払った加夏子は鬼のような目で恵美子を睨んだ。

「こうなる事はわかってたでしょ、今更によっ！ 良心が痛むなんて言わないでよねっ！！ アナタ自分の為にこの子を犠牲にしたのよ！！ こんな小さい…こんないい子を…ふざけるなあっ！！！」

がばと立ち上がり胸ぐらを握りしめた加夏子は、振り壊すように恵美子を揺さぶった。

「腕が痛い？ そうだよ、人の痛みなんかより自分の腕が、自分の恋人が大事だよ、その為には他人がどうなろうと知ったこっちゃないでしょ？！ 彼氏に腕を喰いちぎられた気分はどうよ、気持ちいいよね？ いいよね？！」

ざまあみろこのヤロォー！！！」

振り回すだけに飽きたらず、加夏子は恵美子の身体を壁に叩きつけた。
何度も、なんども。

「なにが看護師よ！ なにがりハビリよ！ あんたサイテーだっ！！ どっか行って死ねっ、しんじゃえっ！！」

駆けつけた真山達が二人を引き離すまで、恵美子はなすがままにされていた。

◇

出歩いては駄目ですよと、恵美子の身体をベットに横たえながら九十九は言った。

激昂した加夏子から三人がかりで彼女を引き剥がし、ようやく自分の病室まで連れてきたところであった。柴田と真山は、加夏子と共に佐野碧の病室に残っていた。

「…君の方が早く気付くとはね。君があの子を連れて姿を消したのは丁度、友人から君について相談されていた時だった。アイツ心配してたぜ、君のこと」

九十九が若い医師の名を口にしても、恵美子はただ無表情に天井を見上げるだけであった。

「佐野碧と堀川殉、この二人に同じ能力があると判った時点で君にも監視を付けるべきだった。君にはファンが多いよだからね、久我さんあたりなら喜んで協力してくれただろうよ。」

乾いた目で見下ろしていた九十九が、恵美子の横たわるベットの端に腰掛けた。

「今、君には何も無い。君はしくじった。リスクを負い、法に背き、たぶん自分の中にあるものにも背いた。その結果がこれだ。成果も無い。満足感も無い。後悔と慚愧と無力感に苛まれている筈さ。違うかい？」

恵美子は瞬きもせず天井を見続けた。

「これから君にどんな罰が与えられるのか、医者である僕には判らないし興味も無い。腕一本喪う事で、君は充分に罪を償ったと思えなくもない。だがそんな事はたぶん、どうでもいい事なんだろう。大事なのは二つ。君は看護師から、手帳の世話にならなきゃいけない身体障害者になったって事。そしてもう一つ…乃木修司の症状に日本屈指の精神科医が興味を持ったって事」

瞬かない瞳が、ゆっくりと九十九を見た。

「…つまり、この僕が、さ…」

恵美子の目を真っ直ぐに見つめながら、九十九は初めて、染み入るような笑顔を浮かべた。

「彼を東京へ連れてゆく。僕に出来るのは、もうそれだけだ」

それだけ言うと、九十九はじっと恵美子を見つめ、それ以上何かを口にする事は無かった。

ただ静かに恵美子の髪を撫でた。

何度も何度も、繰り返し、繰り返し飽くことなく。

いつしか、恵美子の目尻から透き通った光がいく筋も流れ落ち、ベットの縁に吸い込まれていった。

止まらず、ただ静かに。

◇

やあ〜れやれっと
さすがにチト疲れたなあ

病院の正面玄関を背に、転がるように沈みつつある夕日を眺めながら九十九は坂を下っていた。
尾道に着いて早々、加夏子や殉、それ以外の病人・怪我人を何人も見て回り、地元警察の簡単な事情聴取…とは言え、
色々な点をうまくぼかして答えねばならなかったが…に対応し、残してきた仕事の為の連絡を幾つもとり、院長への現
状報告を行い、今夜の宿を確保し、等々。
デスクワークの多い彼にとっては骨の折れる一日であった。

これ全部真山さんに押しつけたら、三日としないで発狂してただろうな
ああ見えて先輩、けっこう面倒臭がり屋だし

昔からこまごました事は僕の方が得意だったっけ
道場を継がなかったのだから結局、他人に教えるのがまどろっこしくてやってられなかったからだし
でもまあ、やりたいこと優先させてとっとと辞めた僕も先輩と同類ってとこか

さてと、今夜の食事はどうするかな…

海が近い街の魚料理は旨いのだろうかなどとボンヤリ考えながら猫背気味にふらふら歩いていた九十九の足が、街灯の
下を過ぎた所でピタリと止まった。
飄々とした顔つきが一瞬で別人に変わる。

気配。
感じた事の無い異様な気配が肌を撫で上げた。

こちらに向けられたものではなかった。
例えるなら、移動中の猛獣に森の中ですれ違ったような感覚。
否応無しに生存本能が悲鳴をあげていた。

何かを見た訳でもなく気配の漂ってくる方向へ構えたのは、かつて真山と共に××道場の竜虎と称された九十九の非凡
さ故であった。

気配が、止まった。
肌を刺す感覚が急に強くなる。
相手もこちらを認識したのだと判ると同時に、九十九の背がぐうっと伸びた。
真っ直ぐに立ち、眼鏡を取って街灯脇の薄暗がりを見つめた。

……

やがて影が一つ、ゆっくりと姿を現した。

「殉の病院にいた医者か」

影が言葉を発した。

「あなたは」

「兄貴だよ」

「…堀川…烈…」

低く呟き、九十九が唾を一つ飲み込んだ。

「この薄明かりで見分けられるほど顔を晒したことはなかった筈だがな。俺を知ってるのか？」

薄い唇の端を少しだけ持ち上げ、堀川が一步近付いてきた。

目を細めた九十九の眼光が鋭くなる。

「お前、ただの医者じゃないな」